

Title	<書評>機能主義理論の起源 エドワード・ロバート・ドウ・ザーコ 1957年
Author(s)	
Citation	デザイン理論. 1962, 1, p. 78-80
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52416">https://doi.org/10.18910/52416</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書 評

Book Review

## 機能主義理論の起源

エドワード・ロバート・ドゥ・ザーコ 1957年

Origins of Functionalist Theory

Edward Robert de Zurko

Columbia University Press, New York 1957. p265.

この本はその書名からわかるように、機能主義 (Functionalism) 理論の起源を探ろうとするものである。だが今さら古くさくなって通用しない機能主義理論の起源を求めて何になるのかと思う人もあるだろう。事実私たちの周囲を見まわしてみても、機能主義をデザイン上のイデオロギーとして主張する者はほとんどいないといってよい。かつて機能主義を信奉していたような人であっても、現在ではそれを否定したり、否定はしなくとも例えばその人間化といった修正を加えるのが普通であらう。その限り私たちもこのような事情に一面の真理があることを認めないわけにはいかない。たしかに過去のかたちそのままの機能主義は、もはや現在に妥当するものではない。過去のものを現在にも通用させようとすることは、まさに時代錯誤といわなければならないのである。

しかしよく考えてみると、このような場合に機能主義ということばで考えられていることは、単にあの有名な「形態は機能に従う」というキャッチ・フレーズだけではないだろうか。なぜなら私たちは今まで機能主義ということばが理論的に厳密なデザイン上のイデオロギーとして定義された事実を知らないからである。つまり過去のものとしてほうむり去られるべき運命にあるのは、この「形態は機能に従う」というかなり一面的で一義的なことばによって理解されている機能主義なのではないかという疑問が当然生れて来るわけである。

この本書の著者ザーコは、ツェヴィらと同じく、近代建築の様式が機能的様式 (Functional style) であることを認め、機能主義の理論はこの様式の原理として確立している。だからこそ現在はこの機能主義の概念を十分に分析すべき時であるとして、文献上だけに限って、機能主義理論の起源を探ろうとする。ザーコによれば、近代の機能主義はデザイナーの指導原理でもあるが、建築を評価する基準でもある。つまりそれは一つの価値となっ

ている。「形態は機能に従う」というのは基本的な約束にすぎない。だからそこには有用性、合目的性といったさまざまな価値基準が入りこむことになり、誰でもが納得し得るような簡単な定義をすることは出来なくなっている。そのことは近代の機能主義者たちが、自己の主張をたとえ(Analogy)によって補強したり、あるいはたとえだけに頼っていることからわかるだろう。ル・コルビュジエらは機械的効率を、サリヴァン、ライトらは有機的自然をたとえとしてもちだし、ロース、ベルラーへらは道徳の見地から強調しているのである。しかしこのように機能主義が人それぞれによっていろいろな意味に解釈されるにしても、そのどれにも共通する思想が、すべての基礎となっている思想があるのではなからうか。そこに近代の機能主義の妥当性の根拠もあるのではないだろうか。これがザークの問題であると考えられる。

さて、機能主義の起源を求める本論では普通に考えられるようにサリヴァンやグリーンウが起源であるとはされずに、ソクラテスからグリーンウまでの多くの人々の思想がそれであるとされるのである。本質的に近代的な現象である機能主義のテーマについてはヴィオレ・ル・デュクからル・コルビュジエの思想に即して、沢山の書物が著われているし、その思想の内容についても比較的よく知られている。だからザークにとってより必要なのは、ギリシャ時代以来の思想史上つねに現われている機能主義的な思想の存在を確かめることであった。

ザークはソクラテスからグリーンウまで五十人あまりの西洋哲学者・建築家の機能主義的な思想を概観する。ここではその一人一人について述べる余裕はない。私たちは直ちに彼の結論に入る。「機能主義は単独の哲学や文化運動の産物ではない。なるほど1700—1851年の間に産業革命、新古典主義、浪漫主義、生物学が機能主義者の思想表現を助け、豊かにした。しかし機能主義的建築理論はひとりこれらの一つによるものではない。」一つの時代にあっても機能主義的な思想が、それぞれ異った環境から生れているのである。ギリシャの幸福論的哲学からはソクラテス、アリストテレスらが、中世の神学からはヒッポラが、ルネサンスのヒューマニズムからはアルベルティ、ダ・ヴィンチらが、バロックの科学と懐疑精神からはパラディオらが、十八世紀の合理主義、理想主義、実利主義からはシャツペリらが、芸術や自然の浪漫主義の見方からはピュージーン、ラスキンらが、十九世紀の超越論からはウォルフ、ゲーテ、シラーらの思想が生れている。

「こういう歴史的背景に対してみると、近代の機能主義は新しい姿を持っているようだ。「歴史の次元で観察された機能主義的な批評は、歴史的建築を概ね道徳的、倫理的、社会的、形而上的究極的な価値で評価する傾きがあるのに対して、近代建築を評価する時に批評家は、経済性、循環の容易さ、清潔さ、維持のしやすさ、光線のよさ、換気のよさのような一次的又は直接的な価値を強調する傾向がある。」このように形而上的究極的価値としての歴史的機能主義(機能主義的な思想)と、初歩的直接的価値としての近代の機械主義との間には根本的な相異があるようであるが、両者は越えがたい障壁によってへだてられているのではなく、直接的なものはやがて究極的なものに高められるのであるとい

う。このように、究極的価値としての機能主義の存在を確認することによって、機能主義の妥当性の根拠としようとするザークの立場は、かなりの難点を含みながら、私たちにはいろいろ考えるべき問題を提出している。機能主義は元来近代の現象であるのに、それを歴史的な合目的性一般の思想にあてはめることができるかどうか、合目的性一般の思想がはたして究極的な価値なのであろうか、歴史的にそうであったからというのでは論証されたことにならないのではないか、さらに個々の思想家に合目的的な思想が見出されるにしても、それがその人にとって本質的なかどうか、このような疑問を求めていけばもっと見つけることができるだろう。しかし私たちにとって重要なことはこれらを指摘することではなく、この該博な知識の集積を私たちの事情に即して読むことであろう。従って新しくザークが試論として提唱している機能主義の心理学的解釈といったものは大して問題ではないのである。「問題は機能主義を広く解釈することであり、その結果機能主義はその主唱者に制約より、勇気を、価値のある創造的な表現に健全な基礎を与えることになるのだ。」「機能主義のような種々の個人的解釈を許す一般的な思想は、これからも人間に勇気を与えずけるだろう。」機能主義ということばは、いわば近代建築論の枠のようなものであって、過去にも現在にも私たちはそこにさまざまな内容を加えていくべきものではないだろうか。機能主義ということばは一時の流行現象として簡単に忘れさせることができるだろうが、その内容は少くとも現在のところは忘れさせることはできない。あるいは永久にその内容は建築家によって考え出されていくべきものかも知れない。

機能主義に関する反省は、このザークの著書が最初ではない。私の知っているところでは、1948年にオランダのカイ・フィスカが「機能主義の倫理」と題して、1949年にはスイスのマックス、ビルが「機能から来る美しさと機能としての美しさ」と題して、又1950・57年にイギリスのリチャーズが「機能的伝統」と題して、それぞれの仕方で機能主義の内容を考えている。恐らく他にもあると思われる。フィスカは倫理性を、ビルは美的機能を、リチャーズは技術的側面を強調するのに対して、ザークは究極的価値としての合目的性思想で機能主義の妥当性を論証しようとしたといえる。

なお著者ザークについては、アメリカ、テキサス州のライス・インスティテュート建築科助教授であり、又公認建築士でもあるというが、残念ながらその他の著、建築作品にどんなものがあるのか不明である。